

笑う賢治（４）一童話「蛙のゴム靴」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 海上保安大学校 公開日: 2025-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秦野, 一宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15053/0002000115

【研究ノート】

笑う賢治（４）－童話「蛙のゴム靴」をめぐる

秦野 一宏

1.

「蛙のゴム靴」は生前未発表の童話で、昭和 5～6 年に成立したとされる¹⁾。その初期形は「蛙の消滅」と題され、大正 10～11 年頃に書き上げられていたようだ²⁾。初期形、後期形ともに＜笑い＞が満ち溢れた作品だが、その笑いの質にはかなりの違いがある。総じて賢治にあっては初期形とされる側に奔放な笑いが見られるが、その差を考察しつつ、賢治における笑いの意味を考えてみたい。

「蛙のゴム靴」の残された草稿の表紙には赤インクで大きく「動物寓話集中」と記されていた。動物寓話というけれど、賢治の寓話は『イソップ物語』のように動物に託して人間世界を諷し、人間のモラルを象徴的に表現しているとしても、おしつけがましい教訓とは無縁だ。

たとえば「動物寓話」の一つと目される童話「朝に就ての童話的構図」では、蟻がきのこの出現におどろくというありふれた場面を取り上げているが、磯貝英夫はこの作をこんなふうの評している。「まっすぐにのびのびと叙して、さわやかで屈託のない子どもの笑いを笑わせてくれる筆は決して凡ではない」³⁾。ここには「賢治の自然への深い感情移入」がまずあって、その点において「世の多くの、子供のために頭でつくられた童話とは、質を異にする」⁴⁾と。同じような「自然への感情移入」は、初期形の「蛙の消滅」および後期形「蛙のゴム靴」双方に関しても見られるのではない。たとえば、「蛙のゴム靴」の中にある、カン蛙を見初めた時のルラ蛙の所作ひとつ見れば、作者の「感情移入」がほのぼのと伝わって「屈託のない」笑いが醸成されているのがよくわかる。

「あの方だわ。」娘の蛙は左手で顔をかくして右手の指をひろげてカン蛙を指しました。」

恥ずかしさを表すしぐさとして「手で顔をかくす」のは人間特有のもので、ここでは明らかに、人間を透かし見せる擬人化の手法が使われている。とはいえ、通常、選択するという意味合いで相手を「指す」時には人間ならば、人差し指を使う。しかし蛙は人差し指が人間のように自由にならないので、蛙らしく指をひろげざるを得ない。まるで何のことかわからないという時に人間ならば、けげんな顔つきををするところ、カン蛙は「けろんとした顔つき」になる、等々。こんな、蛙ならではのと思わせるユーモア交じりの愉快な動きあるいは言葉遣いは物語のあちらこちらで出くわす。人間を指す「ヘロン」などという蛙語がちゃんとあるというのもおもしろいし、なにより蛙たちが理想形だと信じている平たいかたち、「ペネタ形」が自分たちの体型の平たさに由来していることが可笑しい⁵⁾。

この愉快な「ペネタ形」をめぐる初期形と後期形の扱いの違いから話を始めよう。

どちらの稿でも、蛙たちが自分たちの理想形である「ペネタ形」を見失う点は同じだが、初期形では「ペネタ形」を見失った結果の災厄に力点があるのに対し、後期形では「ペネタ形」を見失うきっかけを作った原因に力点が置かれている。「蛙の消滅」から「蛙のゴム靴」へと題名が変えられたのは、この力点の変化と符合する。

「蛙の消滅」でも「蛙のゴム靴」でも、ブンとベンがカンに対してゴム靴と結婚をめぐる嫉妬から謀りごとをしかけた結果、三疋ともに畑の杭の穴に落ちて出られなくなる。どちらも「パチャパチャパチャパチャ」をいう音によってもがいている姿が伝えられ、「夜になりました」「夜が明けました」「日が暮れました」「夜が明けました」と時間経過が強調される点では変わらない。ただ、「蛙の消滅」では、三匹はその後、あつけなく溺れ死んでしまう。死んでしまいはするのだが、ここでは死という言葉はまったく使われない。「もう三疋の姿は見えません。／可哀さうに消滅してしまったのです」。数日間は瀕死の状態でもがいていたけれど、最終的に力尽きて

「消滅」する。その展開からすれば一見、慢心だの嫉妬だのを断罪する、ありふれた勧善懲悪の結末のように見えなくもない。しかし、それならなぜ、＜可哀さうに死んでしまひました＞とならないのか。なぜそれは「死」ではなく「消滅」と呼び変えられるのか。死は命が尽きることで、そこに何かしら情的なものがからむことに違和感はないが、いくら「可哀さう」だなどと言われても、「消滅」となるとあまりにもあっさりしすぎではないか。消えて滅する。存在したものは法則通りに消え果てるだけで、そこに喜怒哀楽の感情が働く余地はほとんどない。あるいは、背景には広大無辺の宇宙が想定されているのか。それとも、命を明滅と観る哲学的観想が背景にあるのか。いずれにせよ、その無を見据えた視線の非情さを作者はよしとしたのであろう。

一方「蛙のゴム靴」の最後はまったくちがう展開になる。

まず、「パチャパチャパチャパチャ」という四度の擬音表記のあとにそれぞれ、「ルラ蛙はまたお父さんのところへ行きました／いくら起しても起きませんでした」という文言が繰り返され、死に瀕した三疋を気づかって右往左往するルラ蛙の姿が印象づけられる。そしてその後、ようやく目を覚ましたルラ蛙のお父さんが駆けつける。

三疋とももう白い腹を上へ向けて眼はつぶって口も堅くしめて半分死んでゐました。／みんなでごまざいの毛をとって来てこすってやったりいろいろしてやっと助けました。／そこでカン蛙ははじめてルラ蛙といっしょになりほかの蛙も大へんそれから心は改めてみんなよく働くやうになりました。（下線による強調は筆者のもの。以下同じ。）

ここではブン、ベン、カンの三疋は、ルラ蛙とその父親の尽力によって九死に一生を得る。「消滅」を、三疋ともに救われるハッピーエンドに変えたのは「奇矯」を避け、「リアリティを増そうとする意図の現われ」だと解釈されるところだが、「消滅」を回避することが「リアリティ」の増幅に寄与するとは私には思えない。

リアリティだけを問題にするなら、晩年に「北守将軍と三人兄弟の医者」

なんて奇態な作品を世に出さないだろう。この物語は、十年にわたって幾度も改稿を重ねながら、根本のところ、長きにわたって馬に乗り続けたために將軍のズボンが鞍にくっつき、鞍は馬にくっついてはなれず、人馬と一体となってしまうという設定の＜奇矯さ＞は残されたままなのだ。それどころか、改稿の最終段階においてさえ、作者は、頭と帽子がくっついてしまっているという新たな奇天烈な設定を検討している。

賢治は笑いを愛し、生涯、笑いつづけた。ただ後年になると、奇矯な世界をことさらに喜んでそれでよしとする若さが失せたということだろう。笑いの発作とも称すべきものが若き賢治にはあった。たとえば「北守將軍と三人兄弟の医者」の初期形では、人馬一体となった將軍の治療をはじめにあって医師のホトランカンは、「発泡用意」「発泡はじめっ」と叫ぶ。もちろんこれは、砲を泡に言い換えた駄洒落である。治療を戦いに見立てたところはじつに愉快ではあるが、さすがにこんな、物語の推移と関係しない、その場限りの駄洒落は後期の賢治は使わない。「蛙の消滅」では、カン蛙は芋むしを仲人にして、かぶとむしの娘とされるてんとうむしと結婚する。新婚旅行にはカン蛙は花嫁のてんとうむしを「頭にとめて」出かける……。この突拍子もない、読者の頭が混乱するような展開は強烈で、一種電氣的な笑いを誘いはする。しかしそこに執着すると、その表面的なナンセンスに眼がいつてしまい、根本の肝心なことが伝わりにくくなる、一それが問題なのだ。考え方が決定的に変化したというわけではない。見方を変えれば、ナンセンスのあり方が変わってきたともいえるだろう。改作にあたっては、＜好物の＞ナンセンスがただのハチャメチャな玩具に墮してしまわぬように、最大限の工夫が払われることになる。総じてこうした改作に向けての笑いをめぐる賢治の姿勢は一貫している。

指摘しておかなければならないのは、「蛙のゴム靴」のめでたしめでたしというありふれた結末の本質的な意味は、「消滅」とさして変わらないということだ。「消滅」していく姿をこと細かく記していく改作前の内容が「奇矯」というなら、「そこでカン蛙ははじめてルラ蛙といっしょになりほかの蛙も大へんそれからは心を改めてみんなよく働くやうになりました」という改作後の最後の一行はあまりに陳腐すぎて、逆に、何か端折ったような

生気のないハッピーエンドになっている。ややもすると、こちらの事態の方がより「奇矯」に見えてくる。「ビヂテリアン大祭」では最後に、動物を食すことをめぐる真剣な議論は結局はみな、祭りを主宰する「ビヂテリアン」側の余興であり、やらせであったことがわかる。懸命に「ビヂテリアン」を応援してきた語り手（「私」）は急に意気が上がりなくなり、「あとの所はみなさんで活動写真のおしまひのありふれた舞踏か何かを使って勝手にご完成をねがふしだいであります」と言って、突然、物語を閉じてしまう。「蛙のゴム靴」の最後は、この「ビヂテリアン大祭」の＜やる気なく投げ出すかのような＞エンディングほど強烈ではないが、事件以後のカンやブンたちの運命に対する語り手のトーンダウンには何かしら似たところがある。昔話によくある、みんな幸せに暮らしましたとき、「どっとはらい」のような、物語の終わりを暗示するだけのできあいの結末のようでもある。

評者によっては、この結末に勧善懲悪的な要素を読み込んで、「作者の人間的な成長あるいは童話観のそれ」を認めようとする者もいる⁷⁾。しかし、「心を改めて」などという厳めしい言葉を笑い抜きで、文字通り受け取ってもいいものか。それはあまりに安易すぎやしないか。いったい、蛙たちは何を改めたというのだろう。カン蛙とルラ蛙との結婚については、それが人生の最終ゴールであるかのように、「いっしょに」なったこと以外は何も伝えられず、また、ブン蛙とベン蛙については、彼らは何をどのように反省したのか、まったく触れられることはない。このとってつけたような紋切型のハッピーエンドは、勧善懲悪のかたちをなぞりながら、逆に何かしら、勧善懲悪を避けようとする意思の表れであるようにも見える。

初期形「蛙の消滅」では、悪行の結果の報いとしての死が「消滅」という言葉で強調され、それなりに強烈な印象を生み出していた。「もう三疋の姿は見えません。／可哀さうに消滅してしまったのです」。そして「蛙の消滅」の最後はこう結ばれる。「てんたうむしがどうなったかといふのですか。／てんたうむしはとうにおうちへ泣いて帰って来てゐます」。「とうに」という副詞がある種、残酷に響く。「蛙のゴム靴」にはこの種の、突き放したような、露骨な冷たさはない。

「蛙のゴム靴」では、話全体が絶妙な軽みを帯びる。ここでは、＜報い

>という発想はきれいさっぱり拭い取られている。＜心を改めました＞系の紋切型、ありきたりのパターンを使うことは結果的に、死による報いを軸とする硬直した勧善懲悪の物語を笑っていることになる。さらに言えば、この気の抜けたようなハッピーエンドの終わり方は、「ペネタ形」への裏切りや、ゴム靴騒動をめぐる作者の＜もの言いたげな顔＞を消す効果もある。

2.

中野隆之は「蛙のゴム靴」の内容を簡便に、こうまとめている。「この話は理想を求めていた蛙たちの心の荒みの結果、瀕死の状態に陥り、そこからやっとのことで生還した物語である」⁸⁾。このまとめで概ね間違いはなさそうだが、問題は「理想」や「心の荒み」の内実にある。蛙たちはみな、向上心をもって何かに励んでいたわけではない。「理想」といっても、それは自己満足と強く結びついたもので、「ペネタ形」への礼讃は、繰り返される自分たちの満ち足りた毎日を祀り上げているにすぎない。自己満足と日々の繰り返しこそが彼らの生の内容そのものであった⁹⁾。

その満ち足りた日々のなかで、「ヘロン」（人間）のゴム靴が話の種として取り上げられる。「この頃、ヘロンの方ではゴム靴がはやるね」―「ほしいもんだなあ」という蛙たちの会話はまさに、雲見の最中、まさに雲がペネタ形になりかけている時に、話題に上った。蛙たちの心が＜荒んだ＞結果、人間のゴム靴が欲しくなったということではない。

「この頃、ヘロンの方ではゴム靴がはやるね。」ヘロンといふのは蛙語です。人間といふことです。

「うん。よくみんなはいてるやうだね。」

「僕たちもほしいもんだな。」

「全くほしいよ。あいつをはいてなら粟のいがでも何でもこわくないぜ。」

「ほしいもんだなあ。」

「手に入れる工夫はないだらうか。」

「ないわけでもないだらう。たゞ僕たちのはヘロンのとは大きさも型も大分ちがふから拵え直さないと駄目だな。」

「うん。それはさうさ。」

「ヘロン」ではゴム靴が流行っているらしいと一疋が話し出す。その後の会話は初期形でも後期形でも、カンかブンかベンか、誰のものかはわからない。ほしい、という言葉が三つ並んでいるのだから、三疋ともにほしいがっていることがわかるようにはなっている。言い換えれば、ゴム靴がほしいというのは、カン蛙一人の願いではないのだということだ。願いはどこまでも「僕たち」のものだ。ここでのゴム靴の話は、蛙たちの世間話の域を出ないように見える。

ただ三疋のうち、カン蛙だけが実際の獲得に向かって動き始める。あるいは、ゴム靴をめぐる三疋の会話のなかで、「手に入れる工夫はないだらうか」と、他の者よりも具体的に、一步踏み込んだせりふを言ったのがカンであったのかもしれない。とすれば、カンはほんのわずかだが、他の二疋よりもゴム靴への執着度が強かったことになる。とすれば、「僕たちののはヘロンのとは大きさも型も大分ちがふから拵え直さないと駄目だな」と、蛙のゴム靴にするその難しさを指摘されてもひるまないのも了解できる。実際、彼はヘロンのものを自身で拵え直すこともいとわなかったのだ。言い換えれば、欲望が差異を生み、「かんがえる（＝考える）」ことを促し続けるのである。カン蛙と考えるは同じ駄洒落でも、「北守將軍と三人の医者」初期形で見られた語呂合わせ（発泡と発砲）とは違う。このカンガエルという洒落めかした同音異義語は、物語を＜展開させる＞力をもっている。それは滑稽さを保ったまま、真剣に、＜分裂＞のテーマ、差異化する個のテーマを引き入れてくる。

あとでカン蛙は腕を組んで考へました。桔梗色の夕暗の中です。／しばらくしばらくたってからやっと「ギギギ」と二声ばかり鳴きました。

そして草原をペタペタ歩いて畑にやって参りました、

それから声をうんと細くして／「野鼠さん、野鼠さん。もおし、もおし。」と呼びました。

ここで＜考える＞ことの意味が特化される。雲見の本質は考えることではなく、見ること、ひたり感じることであったが、ここでは感じることから考えること、脳内思考への移行が起きている。「しばらくしばらく」たってから「やっと」「ギギギ」と二声ばかり鳴く。この「しばらくしばらく」から「やっと」に至る＜張りつめた＞、個に沈潜する時間こそが、蛙世界に新たな局面を作り出す。「ギギギ」はどうすべきか思いつめ、最終的に下された決断の瞬間を示している。

カン蛙は方法をさぐりながら、友人たちには相談せず、自分ひとりで計画を推し進めた。それは平たく、同じであるということに見出される蛙仲間の美しい理想―「ペネタ形」―への裏切りである。仲間に諮ることなく秘密裏にことを進めようという、このカンのさもしい考えが、薄暗い「桔梗色の夕暗」の中で湧いてくるのもおもしろい。

注意したいのは、三疋がゴム靴をほしがっている理由である。ゴム靴は最初は実用的なものでしかなかったが（「全くほしいよ。あいつをはいてなら栗のいがでも何でもこわくないぜ」）、カン蛙が実際にそれを手中にし、それを履いた姿を友人に見せびらかすうちに、当のゴム靴の価値が変化してくる。蛙たちにとってのゴム靴の獲得は別の意味合いを帯びてきて、いろんなものの＜シンボル＞の集合体になる。たとえば、カン蛙が仲間の二疋に、できあがったゴム靴を自慢する場面を見てみよう。

「いや、これはひどい難儀をして大へんな手数をしてそれから命がけほど頭を痛くして取って来たんだ。君たちにはとても持てまいよ。歩いて見せやうか。そら、いゝ工合だらう。僕がこいつをはいてすすつと歩いたらまるで芝居のやうだらう。まるでカーイのやうだらう、イーのやうだらう。」

ここでのゴム靴の価値はもう、あれば便利という実用的なもの以上のものになっている。ゴム靴は新たな意味を吸収していくのだ。

それは、アカーキイ・アカーキエヴィチ（『外套』）の新調外套を想起させる。ゴム靴は、手に入れるのに「ひどい難儀」をしたことで、アカーキ

イの新調外套とも比較し得るほどのとてつもなく貴重なものになる。

アカーキイは外套を新調するために、爪に火を点すような生活を強いられるが、そのような辛い思いをして金を節約する過程で、できあがってくる外套には大きな付加価値が付き、最終的には「生涯の伴侶」と呼ぶに値するものとなった¹⁰⁾。ただ注意をしなければならないのは、カン蛙の場合、ゴム靴を獲得する上で「ひどい難儀」をしたのは野鼠に馬や犬、猫、「たゞの鼠」たちで、カン本人ではないということだ。なににより、その依頼仕事には報酬の問題が出来る（「その渡しやうもいづれあとでお礼をよこせとか何とか、気味の悪い語がついてゐたのでせう」）。ゴム靴調達を依頼された馬に至っては、「あとでゴム靴をごまかしたことがわかったら、人間からよほどひどい目にあはされる」可能性さえあった。

とりわけ、苦勞したのは、全体を心配して手筈をととのえた野鼠である。野鼠は、かつて自分が病に倒れた時にカン蛙から「親身の介抱」を受けたその恩返しに、ゴム靴の調達依頼を引き受ける。しかしそのことで嘗めた辛酸たるや、尋常のものではなかった。依頼を受けた次の日の晩、野鼠は「いかにも疲れたらしく、目をとろんとして、はああとため息をついて」カンにこう言った。「ひどい難儀をしたよ。大へんな手数をしたよ。命がけで心配したよ」。この一節と、先ほどの引用した下線部分のカン蛙の言葉とを比べてみてほしい。「ひどい難儀」「大へんな手数」「命がけ」という野鼠が使った単語を、カン蛙はそっくりそのまま自分の言葉として利用し、友人たちに野鼠の苦勞を自分のものとして語っているのである。

カン蛙は、調達の段取りを練って実際に手配してくれた野鼠の苦勞は承知しながら、そのことにまったく触れないのだ。それどころか、カン蛙はゴム靴の受け渡しの際にも野鼠に礼も言わず、相手の「命にさわるほどつらい」心勞を思いやることもない。ただもう「その立派なゴム靴」に心奪われ、「嬉しくて嬉しくて」口は「むずむず云ふ」だけで、感謝の念も忘れ果てている。引き受けてもらった時は「どうもありがたう。願ひするよ」と言っていたことを考えると、お礼を忘れるのは性格に由来しているわけではなさそうだ。つまり、ゴム靴を手にした時には、相手のことなどまったく考えられない、それほどまでに、喜びが大きかったのだろう。

カン蛙は、自分の足に合うようにこしらえ直すと悦に入って、「にたにた笑ひながら」ゴム靴を足にはめ、その晩「一ばん中歩きまは」る。『外套』のアカーキイ・アカーキエヴィチは、辛い思いをして金を節約し、自分の力で新調の外套を手に入れたが、カン蛙はいわば他人の苦労を盗み取る。新調の外套が届けられた時には、アカーキイは天にも昇る気持ちになる。これは当然だ。アカーキイは、金を工面するため、長期にわたって常軌を逸した節約生活をしてきたのだから。しかしカン蛙は違う。彼は靴をこしらえ直す以外、何もせず、ただ野鼠たちに苦労を強いただけなのだから。どうやら、ゴム靴をめぐるカン蛙の所業からは、価値は自分の苦労だけでなく、他人の苦労によっても高められるという滑稽なく金言＞が導き出されてくるかのようだ。

アカーキイの新調外套とカン蛙のゴム靴。両者にはさらなる相違点がある。アカーキイは外套を新調せずに、以前のぼろぼろの「外套」を着続けると、厳寒のペテルブルグの冬を越すことができない。新調の外套は、いわば生きぬくための必需品であった。一方、ゴム靴の方は、「栗のいがでも何でも」こわくなくなるという程度のもので、それがないと生きていけないというほどのものではない。

さらに両者を比較して興味深いのは、新調の外套は寒さから身を守る以外にも意味があるということだ。アカーキイは「遠目からは貂に見まがうような猫の皮」を襟に付けることにした。つまり、外套はここで、身を守る以外に、ぎりぎり人としての＜体裁＞を保つためのものになるのだ¹¹⁾。

翻ってカン蛙のゴム靴はどうだろう。ゴム靴はいつしか、それを履くと「カーイ」や「イー」のように見えるという別物になっている。

「カーイ」や「イー」とは何か。よくはわからない。ただここには、「カン」「ブン」「ベン」とはまったく異なる長音の響きある。この長音が蛙たちにとって快いものであることはまちがいない¹²⁾。あるいはそれは、蛙たちの心を擽る芸名なのだろうか。読者は笑いながら、スターが蛙社会にもいるのかしらんと、あれこれ想像を逞しくする。これは一種の笑いの手法で、あえて説明されないところ、欠落に意味がある。この欠落が読者を能動的にし、積極的な参加を促す¹³⁾。

「カーイ」や「イー」が履くようなカッコいいゴム靴。これは「遠目からは貂に見まがうような猫の皮」のような儚しいまがいものではなく、こちらから堂々と見せつけるファッショングッズになっている。ゴム靴は蛙のゴム靴になることで装飾品になり、他の蛙の欲望を強くそそのめるのだ。蛙たちは日ごろから「ヘロン」がゴム靴を履いている姿を目撃している（「みんなはいているやうだね」）。ただ彼らには、ゴム靴を履いた人間への羨ましさはあっても人間への嫉妬の感情などはさらさらなかった。ベン蛙とブン蛙はゴム靴を履いた相手が人間ならぬ仲間の蛙であるからこそ嫉み、心の平静を保てず、もはや雲見やペネタ形を堪能したいなどという悠長な思いは消し飛んでしまう。カン蛙自身も、ゴム靴を履くともう、これまでの雲見への思い入れは立ち消えてしまう。たとえば、ブンとベンが「雲見の時間」だとカンのもとに誘いに来る場面――

「カン君、カン君、もう雲見の時間だよ。おいおい。カン君。」カン蛙は眼をあげました。見るとブン蛙とベン蛙とがしきりに自分のからだをゆずぶってゐます。なるほど、東にはうすい黄金色の雲の峯が美しく聳えてゐます。

「や、君はもうゴム靴をはいてるね。どこから出したんだ。」

目を開けるといつものように、「美しく聳え」る「うすい黄金色の雲の峯」が見えるが、その＜美しさ＞に心動かされることはない。それはただ、模型のようにそこにあるだけ……。ここでは、同意を表す「なるほど」というたった一つの副詞が絶妙な効果を醸し出す。この副詞によって、これまで讃美していた「黄金色の雲の峰」に対するカン蛙の印象の変化が心憎いばかりに言い取られている。

このあとはもう、カンの履いているゴム靴の話ばかりになってしまい、雲見の話は立ち消えてしまう。―「雲の峯は銀色で、今が一番高い所です。けれどもベン蛙とブン蛙とは、雲なんかは見ないでゴム靴ばかり見てゐるのでした」。

すでにこの段階で、ゴム靴はベン、ブンにとっても、もう雲見の愉しさ

を忘れさせるほどの魅力を持っているのである。ゴム靴は蛙のように平たくはない。なのに、カン蛙もブン蛙もベン蛙もこの平たないゴム靴に強い憧れの念を抱く。結果的に「ヘロン」（人間）のモノは、ペネタ形を超える価値を生み出してしまった。絶対的な平等（＝平たさ）、自己肯定の上に成立する自分たちの理想は地に落ち、だれも振り返らなくなる。

ただ、この段階ではまだ、ベンとブンにとってのゴム靴は憧れのグッズではあっても、「栗のいがでも何でも」恐くなくなるという利便性を与える機能性豊かなモノでしかない。ゴム靴はルラ蛙の登場で、さらに価値が高まる。

婿探しをしていたルラ蛙が、ちょうど三疋がいっしょにいるところにやってくる。このルラ蛙がゴム靴に新たな、大きな価値を付加するのだ。ゴム靴の有無は婿を選択するうえでの決定的な因子となる。ゴム靴は蛙たちの中で、それを履いた者を引き立て、特別な者にする役割を果たしたのである。

ルラ蛙が花婿を探していると知ると、ベン蛙とブン蛙はここぞとばかりに、「僕なんかはどうかなあ」「あるいは僕なんかもいゝかもしれないな」などと、自分を売り込みにかかる。ところがカン蛙だけはルラ蛙のことなど眼中になく、一言もものをいわずに、ゴム靴を履いて「すすすつとそこらを歩いてゐ」るばかり。このカンの姿がどうやらルラ蛙の心を射たらしい。ルラ蛙が「カーイ」や「イー」を知っていたのかどうか、わからないけれども、いずれにせよ、彼女にはカン蛙が憧れのスターのように見えたに違いない。

スラプスティック喜劇さながらに、とんとん拍子に話は進み、その場でカン蛙とルラ蛙の挙式の日取りまでもが決まってしまった。その日取りが決まる瞬間、カン蛙だけが「すまして」空を見る。その時にカンの目に映った風景はこう伝えられていた（この個所は「蛙の消滅」になく、「蛙のゴム靴」になって書き加えられた個所である）。―「そこでは雲の峯がいままたペネタ型になって流れてゐます」。この一節は、「ペネタ型〔形〕」を見たのはカンだけで、ベンとブンの気分は雲見などとは無縁であることを示している。カンだけは見たのだが、その内実はこれまでとはまるで違う。お

そらく、カンの目にちらりと映ったその雲の峰の「ペネタ型」は、仲間たちと共有不能の気持ちのよいものであった。つまり「ペネタ型〔形〕」はここに至ってはじめて、他と共有できないきわめて個人的なものになったということだ。人間界から持ち込まれたゴム靴は、蛙たちの抱く理想、ペネタ形のイメージを大きく変えてしまう力を持っていたのだ。

童話「貝の火」では、兎の子ホモイは「ダアイドコロといふ木」になったという「角パン」を狐からもらい、家に持ち帰る。事情を察したホモイの父親は、人間から盗んだものを食するわけにいかないと最初は拒否していた。にもかかわらず、悪事を裁くはずの貝の火が美しく燃え続けたことから、つい受けとってしまう。その後は父親の暗黙の了解のもと、一家は、狐から定期的に届けられる角パンを抵抗もなく食しはじめた。それによって一家の食の習慣そのものが大きく変わり、結果、食生活のみならず、ホモイたちの生そのものが微妙に変容していくことになる。

カン蛙のゴム靴の取得は、ホモイ一家の角パンの受容とよく似ている。ともに欲望に駆られ、自分たちとは異なる人間の文化、外来の出来あいの文化をこっそり受け入れてしまうことで、これまでの伝統的世界の基盤に亀裂が入り、何か生活の歯車がかみ合わなくなってくる。

「貝の火」では、「ダアイドコロといふ木」からパンを盗んでくるのは狐で、兎のホモイは今後、狐が鶏をつかまえるのを黙認するという交換条件のもと、狐の手からパンを受け取った。カン蛙のゴム靴は盗んだものではないが、間接的ではあるにせよ、嘘を介在させての人間への裏切り行為によって手に入れたものである（「馬はあとでゴム靴をごまかしたことがわかったら、人間からよほどひどい目にあはされるのでせう」）。人間自体は前面に登場することはなくとも、物語の舞台は人間とは無縁の自然というわけではないのだ。野鼠の暮らしていたのは人間の畑だし、蛙たちの住処の近くを流れる「堰」もおそらく、人間が拵えたものだろう。カン蛙のゴム靴を「めちやめちや」にするための萱の刈跡も、結果的に三匹が溺れる、麦を干したあとにできた「杭」穴もみな、人間の生活と関わっている。なにより、蛙たちの間でゴム靴が話題になったのは、目の前を立ち歩く人間たちを見て、人間世界でそれが流行っていることを知っていたからにほか

ならない。ひと言で言うと、蛙たちの暮らす世界そのものが、まさに人間の世界と深く交錯しているのである。人間たちの意図とは関係なくとも、その影響は免れないのだ。

3.

これが誰のせりふか、再読してもよくわからないというふしぎな例が賢治童話にはたまにある。作者の不備ではない。作者自身が意図的にわからないようにしているのだ。たとえば「蛙のゴム靴」では－

「明日の朝ね、雨がはれたら結婚式の前に一寸散歩しようと云ってあいつを引っぱり出して、あそこの萱の刈跡をあるくんだよ。僕らも少しは痛いだらうがまあ我慢してさ。するとあいつのゴム靴がめっちゃめっちゃになるだらう」(A) — 「結婚式がすんだらあいつら〔カン蛙とルラ蛙〕を引っぱり出して、あの畑の麦をほした杭の穴に落してやりたいね。上に何か木の葉でもかぶせて置かう」(B)。

このAとBの引用、どちらかがベン蛙で、どちらかがブン蛙のせりふであることはわかるが、どちらのものは容易に決定できない。その状況は「注文の多い料理店」に登場する「すつかりイギリスの兵隊のかたち」をした「二人の若い紳士」を思い起こさせる。二人は成金で太った体型も同じ、年齢も似た年ごろで、身につけている衣服も変わらない。読者が二人を弁別する手がかりは、一方は二千四百円の獵犬を連れているが、もう一方は二千八百円の獵犬を連れているという差だけであろうが、この犬の値段の差は逆に二人の紳士の人間としての差異の無さを強調してしまうことになる。二人の紳士の言葉は会話というより、一人の人間が自問自答しているような態である¹⁴。時として、二人の声はおのずから一体化してしまい、そのせりふに切れ目すらなくなってしまう（「早くどこか室の中へはいたいものもんだな」—「そしてテーブルに座りたいもんだな」等々）。二人のイギリスふう紳士のせりふには個性がなく、実質的な差がないわけだが、それは、ブン蛙とベン蛙の次のようなせりふにも共通している。

たとえば、ブンがベンのところへやってきた折の二人のせりふは—

「今日は、今日は。」「はい。やあ、君か。はいれ。」「カンが来たらう。」
「うん。いまいましいね。」「全くだ。畜生。何とかひどい目にあはして
やりたいね。」

「今日は、今日は」と最初に呼びかけるのは「ベン蛙のところへやってきた」ブン蛙で、それに「はい」と答えて中へ入るように促すのがベン蛙。以下、ブン、ベンの順でせりふが続く、「何とかひどい目にあはしてやりたいね」というせりふはブンのものであることがわかる。このブンのせりふの直後に、カン「萱の刈跡」を歩かせるという企みを口にするわけで、そうすると、「萱の刈跡」を歩かせたいというのはベンのせりふ、あいづら「杭の穴」に落としてやりたいというのはブンのせりふとなる。繰り返して読むか、メモを取りながら読むのであれば、特定はできないことはない。しかし、そんな七面倒くさいことを考えながら読む読者はいないだろう。実際、いくら頑張っても特定できないせりふもわんさかとある¹⁰⁾。要はここでは、せりふはブンのものでもベンのものでも変わらないということだ。この異様なばかりの差異の無さが、蛙たちの特徴であり、「蛙のゴム靴」という物語の笑いを醸成する最大の要因となる。

たとえば、「蛙のゴム靴」の冒頭は三匹がみな変わるところがないということ強調して、こんなはじまり方をする。

松の木や檜の木の林の下を、深い堰が流れて居りました。岸には茨やつゆ草やたでが一杯にしげり、そのつゆくさの十本ばかり集った下のあたりに、カン蛙のうちはありました。

それから、林の中の檜の木の下に、ブン蛙のうちはありました。

林の向ふのすゝきのかげには、ベン蛙のうちはありました。

三匹は年も同じなら大きさも大てい同じ、どれも負けず劣らず生意気で、いたづらものでした。

初期形の「蛙の消滅」では、下線部分は「顔つきもよく似て、始終行ったり来たりして居りました。けれども別に親類だと云ふわけでもなかったのです」となっている。後期形の「蛙のゴム靴」では、年も大きさも同じで、生意気であることも、いたずらものであることまでもが似ているとされる。つまり、三足は外形のみならず、性格までよく似ていると強調されるようになるのである。こうして後期形では、この外面、内面双方の類似性が「夏の雲の峰」あるいはペネタ形を同じように、こよなく愛する大きな理由の一つになる。さらに言えば、似たもの同士はカン、ブン、ベンだけにかぎらないらしい。

一体蛙どもは、みんな、夏の雲の峯を見ることが大好きです。じっさいあのまっしろなプクプクした、玉髓のやうな、玉あられのやうな、又蛋白石を刻んでこさへた葡萄の置物のやうな雲の峯は、誰の目にも立派に見えますが、蛙どもには殊にそれが見事なのです。眺めても眺めても厭きないのです。そのわけは、雲のみねといふものは、どこか蛙の頭の形に肖てゐますし、それから春の蛙の卵に似てゐます。それで日本人ならば、丁度花見とか月見とかいふ處を、蛙どもは雲見をやります。

「蛙ども」などという上から見下したような表現を繰り返すところからすれば、この語り手は人間であろう（日本人の花见到言及があるところから、日本人である可能性が高い）。つまり、物語全体を俯瞰する人間の眼が背後にあることに注意しておく必要がある。雲の峯は誰の目にも立派に見えるが、ことに「蛙ども」にはそれがことさら「見事」で、「眺めても厭きない」と語り手は言う。「そのわけは、雲のみねといふものは、どこか蛙の頭の形に肖てゐるし、それに「春の蛙の卵に似て」いるからだという。この雲の峯が崩れてくると平たい「ペネタ形」になる。ペネタ形が「蛙ども」に賞賛されるのもまた、ご多分にもれず、類似したもの、つまり、蛙のからだの平たさに由来する。「雲のみねはだんだんペネタ形になって参りました。ペネタ形といふのは、蛙どもでは大へん高尚なものになってゐます。平たいことなのです」。自分たちに似ているものが高尚であるという自

己礼讃の論理に注意したい。このペネタ形への執着は、カン、ブン、ベンだけでなく、ルラ蛙においても示されている。なにより彼女の身振りに注目したい。

そのとき向ふの方から、一疋の美しいかへるの娘がはねて来てつゆくさの向ふからはづかしさに顔を出しました。

「ルラさん、今晚は。何のご用ですか。」

「お父さんが、おむこさんを探して来いって。」娘の蛙は顔を少し平たくくしました。

人間ならば恥じらってうつむくところをこの娘の蛙（ルラ蛙）は、「顔を少し平たくく」する。なるほど、蛙は蛙なりの恥じらいの表情があるのかと、思わず笑みがこぼれる。しかし、賢治が読者に期待する笑いはさらに奥が深い。どうやらルラ蛙は単に蛙社会の慣習どおりに、恥じらって顔を「平たくく」したわけではなさそうだ。顔を「平たくくする」ことはまさに、蛙たちが好感をもつペネタ形に近づけることである。ルラ蛙は相手の反応を予想し、感じのよさを演出するために、あえてペネタ形へのほめかしを使ったのだ。

結局、蛙たちは自分たちに似ているものを崇め、愛でているのである。ペネタ形は蛙からすれば、「うすい金色」とその形が「永遠の生命」を思わせるという。彼らは自分たちと類似している形をあえて「ペネタ形」と称し、それを理想形に仕立てている。とはいえ、それはあくまでも蛙の感性であって、人間のものではない。「実に僕たちの理想だね」。ペネタ形が蛙の理想形であるのも、その平ったさが自分たちの平たい体型に似ているからで、人間の理想形とは無関係である。このペネタ形を理想一般に置き換えて、寓意として人間の理想を読み取ろうとする見方もあろうが、それは飛躍しすぎで、蛙たちの言葉を無視することになる。

賢治にとって重要なのは＜関係＞であって、物語の＜理想＞の内容をそのまま、人間の、ひいては作者自身の理想としてはならない。鼠には鼠の奇妙な理想形があるだろうし、猫には猫の奇妙な理想形があるだろう。人

間にとっての「ペネタ形」とは何かという問いかけはできるけれども、その場合、それは人間らしい、人間を映し出すような「理想」であるはずだ。人間に置き換えれば、それは、人間が感じる一種の美になるのかもしれない。ただ、ここでいう美は賢治世界に住む蛙や猫たちからすれば、奇妙なものと思えるだろう。なにせ、賢治世界に登場する動物の中には、人間の外見に関してさえ、「頭の上の方に十六本の手がついてゐる」（「畑のへり」）と信じて疑わないものもいるのだから。

重要なのは、カン、ブン、ベン、の三正が同じ感覚を共有できていれば、ペネタ形の雲への思い、雲見は続いていたことだろうということだ。この作品の中でなにより強調されるのは、蛙たちの＜差異なき世界＞の現出である。賢治は全体（＝宇宙、銀河）を見据えながらも、自身が使った「各別各異」（「農民芸術概論綱要」）という言葉に示されるように、それぞれが異なっていることに価値を見出そうとする思想をもっていた。カンやブン、ベン、ルラたちの住む世界はこの各別各異を反・理想とする世界で、ここでは「各別各異」とは正反対の、笑いに包まれた＜あべこべの世界＞が描き出されることになる。

問題の焦点は、比較意識のなさ、意志の欠如と各別各異のはざまにある。平たいペネタ形は理想であることにまちがいない。しかしそれが人間の理想を模したものだと言われると、決してそうではない。金色に言及があると言っても、これはあくまでも蛙の、各別各異を生きない蛙たちの理想にすぎない。そこに切り込んで来るのがカン蛙で、彼は＜僕たちの＞理想を捨て、＜僕だけの＞理想に向かって突き進む。

ペネタ形をよしとし、高尚だと感じるのはどこまでも、蛙たちが自分たち自身に深い愛着を感じているからだ。同胞信頼、同胞愛とでも言うべきものが、このペネタ形には含意されている¹⁰。もちろん、笑い含みで、人間にとって蛙の「ペネタ形」に相当するものはなんだろう、そう問いかけることはできなくはない。

もう一つ、「お父さんが、おむこさんを探して来いって」というルラ蛙のせりふにこだわりたい。この部分は、初期形の「蛙の消滅」では、「あたしは、おむこさんを探しに来たのよ」となっていた。個別性あるいは意志の

問題がここにはある。初期形のてんとうむしの娘はおそらく、自分が結婚したいから婿を探している。背後に誰かの影響があるのかどうか、それはわからないが、少なくとも、彼女自身には揺るぎない結婚への意志がある。一方、ルラ蛙はただお父さん（「がん郎」）の命令にしたがって行動しているだけである。そこは大きな違いがある。おそらくこの変更は、てんとう虫をルラ蛙に置き換えたことから生じたのだろう。どうやら蛙たちの特徴の一つは、確固とした個の意志が欠けているというところにあるらしい。

カンを婿に選んだ理由もきわめて表面的なものである。結婚式の日、ベン蛙とブン蛙はカン蛙の家で花嫁を待っている。そこに花嫁のルラ蛙がお父さんの「がん郎がえる」や仲人の蛙に引き連れられてやってくるわけだが、その時にはカンのゴム靴はブンとベンの計略によってボロボロにされたあとで、カンのはだしであった。つまりは三疋ともにはだしであったわけ、結果、ルラ蛙は自分の選んだお婿さんが三疋のうちのどれかわからなくなる。前回、見初めた時はカン蛙だけがゴム靴を履いていたが、今は三疋ともはだしでぞろりと並んでいる。みんなペネタ型の体形で、どれが自分の選んだ花婿か区別がつかないので、よく見ようとルラ蛙は近くに寄った。

ところがもっと近くによりますと、尚更わからなくなりました。三疋とも口が大きくて、うすぐろくて、眼の出た工合も実によく似てゐるのです。これにはいよいよどうも困ってしまったのでした。ところが、そのうちに、一番右はじに居たカン蛙がパクッと口をあけて、一足前に出ておじぎをしました。そこで〔ルラ蛙〕もやっと安心して、／「あの方よ。」と云ひました。

おそらくこの引用部分は、物語の中でも笑いのウエーブがもっとも高まる場所であろう。花婿選びはルラ蛙にとって人生の一大事である。ところが、人生の一大事にしては選び方があまりにも軽薄すぎる。自身の感性を総動員してカンを選んだ理由が、ただゴム靴を履いていたというだけのことであったわけだから。もちろん靴だけを意識して選んだと

はリラ蛙自身も思っただけかもしれない。しかし、ゴム靴がないと自身の花婿の見分けがつかなくなるということは、自身の思いはどうあれ、結局のところ、彼女がゴム靴しか見ていなかったということの証しになる。一方、ルラ蛙が来たのにも気づかず、ゴム靴を履いて「すっすっ」歩きまわるカン蛙も、自身の立派なゴム靴しか見えていない。「カーイ」や「イー」のように見られたい男と「カーイ」や「イー」のように見える男をよしとする女は、ゴム靴を介して愉快な対の関係にある。

物語はこうして、差異を求める者たちの失敗譚という運びになる¹⁷⁾。思い起こされるのはここでも、「注文の多い料理店」の、「イギリスの兵隊のかたち」をした二人の若い、太った紳士である（二人は、差異を売り物にした山猫の広告文句につられて、「注文の多い」料理店の中に入っていく¹⁸⁾）。どちらの作品にも＜笑い＞が付きまとうわけだが、その笑いはいずれも、平等（＝平たさ）という高尚な理念の陰にひそむ無個性、アイデンティティの喪失と関係している。

4.

アイデンティティの喪失が「蛙のゴム靴」のモチーフの一つであるとすれば、物語にはもう一つ、楽園崩壊というモチーフも見え隠れする。

賢治はさまざまな「楽園」を取り上げた。ある時はそれは、無邪気な子どもの「楽園」だった。「グスコブドリの伝記」では、父母の温かな庇護のもと、森で自然に溶け込みながら、平和に暮らす幸福なブドリとネリ兄妹の幼年期が描かれ、「黄いろのトマト」では、青いガラスの家に住み、二人だけで畑を作り、歌をうたいながら楽しく暮らす幼いペムペルとネリ兄妹の生活が描かれる。両兄妹の無邪気さにあふれた、おだやかで幸せな生活は長くは続かない。前者は災害によって引き起こされる飢饉が、後者はカネが支配する世間との出会いが楽園を崩壊させることになる。一方、「蛙のゴム靴」では、子どもの代わりに青年の蛙たちが登場する。ここでは差異なきこと（＝平たいこと）を理想とする蛙たちの穏やかなく楽園（あるいは＜楽園もどき＞）が、「ヘロン」のゴム靴への執着によって崩れてい

く過程が示されている。

蛙たちは自己充足した世界に住んでいた。その生活はある意味で無邪気で、ある意味で純粋だった。ただ「グスコブドリの伝記」や「黄いろのトマト」と違うのは、楽園そのものの純粋さが差異の無さによって裏打ちされていることだ。あるいは人間の子どもを青年の蛙に置き換えることを含め、「蛙のゴム靴」は「グスコブドリの伝記」や「黄いろのトマト」のパロディになっていると言ってもいい。

この差異なき蛙の＜楽園＞に、人間界からゴム靴が転がり込んで来る。ゴム靴を遠くから眺め、憧れを抱くだけではなく、他を出し抜いて、そのゴム靴を実際に取得した者が現れたことが、＜楽園＞崩壊のきっかけとなる。

一疋だけが別行動をとり、仲間に打ち明けることもなく、自身の欲望を追求しはじめると、とたんに＜楽園＞は揺らぎはじめる。結局のところ、カンを陥れてやろうとブンとベンを罠を仕掛けるが、結局どじを踏んで三疋もろともに杭の穴に落ち、みなが半死半生の憂き目にあった。その瀕死状態から帰還した三疋は一気になんか変わってしまい、もう元には戻れない。私はここでも「注文の多い料理店」を思い起こす。「注文の多い料理店」の二人の紳士の顔、山猫に食べられるかもしれないという恐怖で「まるでくしやくしやの紙屑のやう」になった顔が浮かんでくる。二人の若い紳士は、あと一步で山猫に食べられてしまう恐怖を味わったあと、顔が紙くずのようになった。そして「いっぺん紙くづのやうになった二人の顔だけは東京に帰っても、お湯に入っても、もうもとのとほりになほ」らなかった。同じことがカン、ブン、ベンにも起こったのではないか。

そこでカン蛙ははじめてルラ蛙といっしょになりほかの蛙も大へんそれからは心を改めてみんなよく働くやうになりました。

初期形で三疋を「消滅」させる挙に出た作者が、最終形では救っていること、そのことについては、「作者の人間的成長あるいは童話観のそれが認められるかもしれない」と指摘する評者もいる¹⁹⁾。作者の人間的に成長し

た証しが、蛙たちの改心とよく働く姿に映し出されているというわけだが、しかしそう解釈すると、「蛙のゴム靴」は、笑いを一時中断して「傍観者の利己主義」をとくとくと語る芥川龍之介の「鼻」（大正 5 年）のような作品になってしまう。吉田精一によれば、芥川の「鼻」は「今昔物語巻二十八「池尾禅珍内供鼻語第二十」及び宇治拾遺物語巻二「鼻長き僧のこと」を材料とし、ゴオゴリの「鼻」に暗示されて心理解析を行っている」²⁰という。おそらくはその通りなのだろう。ただ『今昔物語』でも『宇治拾遺物語』でも、さらにはゴーゴリの『鼻』でも笑いの波は途切れることはない。ゴーゴリに暗示されての「心理解析」というけれども、鼻に逃亡されたコワリョーフの心理を作者が真顔で解析するような個所はまったく見当たらない。作者ゴーゴリは道化の仮面をかぶりつつけて、けっして作者の素顔をさらすことはない。ははあ体験、認識上の発見はどこまでも、読者側に任されている²¹。芥川は違う。彼の「鼻」では滑稽な語りが続くなか、物語外から作者がにゅっと顔を出し、語りのトーンを変え、おもむろに解説をはじめ。結果、笑いに破れ目ができてしまうのだ。芥川によれば、「戯奴の眼」だけでは「真正の」ユーモリストたりえないということになるのだろう²²が、見方を変えれば、芥川における笑いは、結局、自身の高尚なく認識の火花>を見せつけるための手段となってしまう。

賢治の笑いには芥川の「鼻」に見られるような破れ目はない。賢治ここでは、真剣なことも笑いながら語る。これまで「笑う賢治」の本シリーズで扱ってきた「北守将軍と三兄弟の医者」でも「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」でも「革トランク」でも、<真面目>な作者自身の素の顔を見ることはない。

「蛙の消滅」で死を迎えることになる三疋の蛙は、「蛙のゴム靴」では、ルラ蛙の父親と、その仲間によって救われるが、そのことと「作者の人間的成长」とは関係がない。この、あまりにも紋切型の改心に、賢治がもろ手を挙げて賛同していたとは到底思えない。たしかにカン蛙は結婚し、ペン蛙もブン蛙も心を改め、「みんなよく働くやうに」になった。一見すると、まるで新たに楽園の時代が到来したかのような書きぶりではあるが、問題はその語りのトーンにある。その言葉はどこまで信頼できるのか。たとえ

蛙たちなりの「改心」があったとしても、その質が問われねばならない。いったい、この改心はほんとうの改心なのか。

死に瀕した三疋の目には、落ちた杭穴の泥水の中から「小さな円い空」が見え、そこには時として「雲のみね」や「ペネタ形」が姿を現わした。この場面、死に瀕したこの時にこそ、蛙たちは無心になって「純粋な心からの雲見」ができたと考える評者もいる²³⁾。しかし、ここは「つめくさの広場」のように無心に「雲見」に没頭できる場所ではない。作中で「雲見」は日本人の花見とか月見に比べられているが、のんびりとした気分にならないと花見や月見はできないだろう。雲見も同じだ。溺れ死に寸前の蛙たちに、雲見などという悠長なことはとてもできない。「雲のみね」や「ペネタ形」への言及は、彼らが自分たちの「理想」からいかに離れてしまったかを読者に気づかせるためのものでしかない。

そのうちだんだん夜になりました。／パチャパチャパチャパチャ／(…)
／夜があけました。／パチャパチャパチャパチャ／(…)／日が暮れました。雲のみねの頭。／パチャパチャパチャパチャ／(…)／夜が明けました。／パチャパチャパチャパチャ／雲のみね。ペネタ形。

三疋は目に飛び込んで来る「雲のみね」や「ペネタ形」によって日が暮れたり、夜が明けたりする時の推移を知り、迫りくる死に怯えていただけだ。それらを見て心を揺さぶられたわけではない。自分たちの理想に思いが至り、後悔の念が湧き上がったわけではないのだ。

「注文の多い料理店」同様、ここでも死の恐怖は、それを味わった者に刻印を残す。「心を改めてよく働くやうになった」のは、死の恐怖の刻印が拭い取れない証しである。もしもほんとうに元の生活に戻ったのであれば、物語はあっさり終わることはない。必ずやそこには、青年蛙たちの重要事であった雲見という習慣に言及がなければならない。そしてもし雲見が再開されたということであれば、語り手は、ペネタ形で示されたかつての「理想」にも言及したはずである。

カン蛙のゴム靴はブン蛙とベン蛙の計略によって「めちゃめちゃ」にな

ってしまったが、ゴム靴の消失とともにペネタ形が復活したわけではない。ペネタ形に思いを寄せるための雲見は、のんびりとした時間の中で自分たちの絆を感じつつ、自己陶酔的になされるものであるが、彼らにはもうそんな余裕がない。恐怖体験を経た彼らは雲見はしない。というよりももう、彼らには雲見はできないのではないか。三疋の蛙は「消滅」は免れたが、俗化し、もう哲学的関心もなければ世界を觀照する心の余裕もない。蛙としての誇らしさ、自尊の念もぐらつき、自分たちのかつての樂園を信じることもできなくなっている。その代わりに、新たに生活の中に加わったものがある。それは女房（ルラ蛙）と勤労である。ルラ蛙には杭穴に落ちた三疋を心配するだけのやさしさはあるが、だからといってゴム靴の有無だけで婿を選ぶような彼女の超弩級の輕薄さが消えたとはとても思えない。では、勤労に関してはどうか。

「心を改めて」「よく働く」、一この最後の一節は意味深長である。いったい雲見をしていた頃の三疋は働いていたのだろうか。物語の中では彼らの労働している姿を思わせる言葉はない。雲見をしなくなっではじめて、言い換えれば、「理想」の喪失と引き換えに、彼らは「よく働くやうに」なるのだ。「よく働く」とは言うけれど、想像するに、その働く姿はいきいきしたものではない。童話「カイロ団長」に登場するあまがえるたちの労働のような嬉々とした、楽しさがあふれるものではない。

「カイロ団長」では「舶来ウェスキイ」にまつわる事件が解決すると、もとより「面白く」仕事をしていた働き者のあまがえるたちは改めて、元気に働きはじめる。彼らには虫仲間から依頼を受けて続けていた、花ばたけをこしらえたり「お庭」を作るというれっきとした「職業」^{しやうげい}があった。だから物語の最後が、「ベッコ」や「ビチュコ」たちの「職業」^{しやうげい}しながらの陽気で、生き生きした会話が締め括られることにもまったく違和感はない。「おい。ベッコ。そこん処を少しよくならして呉れ。いゝともさ」、「ハッハッハ。よう。ビチュコ。おい。ビチュコ、そこの穴うめて呉れ。いゝかい、そら投げるよ。ようし来た」等々。一方、「蛙のゴム靴」の最後には活気などまるでありはしない。「心を改めてみんなよく働くやうに」になったというおざなりで紋切型の締め括り方そのものが、彼らのその後の生活の生

気のなさを伝えている。

ペネタ形を忘れ果てたところに三疋の蛙の＜復活＞がある。時間を要する哲学的道楽である雲見をしなくなつてはじめて、彼らは＜心を改め＞「よく働くやうに」なる。このペネタ形抜きの労働は、目的もなく動き続ける自動機械を思わせる。

繰り返すが、こうなった原因は、カン蛙が手に入れた人間の方ではやっていたゴム靴にある。人間（ヘロン）のモノへの執着が、蛙たちの＜自然の＞生活を変えてしまったのだ。我々、ヘロンである読者はこのように人間の絡んだ起きた顛末をどうみればよいのだろうか。そもそもゴム靴とは我々にとって何を意味するのだろうか……。以下、笑いながら真剣に、ヘロンの一人として、こうした＜蛙世界＞の出来事を人間世界に置き換えて＜考える＞のは、我々読者に振られた役割となる。

注

1) 大沢正善「蛙のゴム靴」、『國文学 解釈と教材の研究』48巻3号、學燈社、2003年2月、35頁。

2) 同上。

3) 磯貝英夫「＜テキスト評釈＞朝に就ての童話的構図」、『賢治童話の手帖』（『國文学』31巻6号改裝版）、學燈社、1988年10月、93頁。

4) 同上、93-94頁。

5) 原子朗『定本 宮澤賢治語彙辞典』（筑摩書房、2013年）では、「ペネタ形」は、気象用語の「ペネトレーティヴ・コンベクション（貫入性対流）」から思いついた造語でないかという高野みはる説を紹介している（649頁）。また同辞典の「ヘロン」の項目では、英語でヘロンはサギ類の鳥だとし、そこから、蛙にとっては、蛙を食うサギと人間たちはともに、「自分たちの生命をおびやかす存在」だという寓意を読み取る（652頁）。さらには、古代ギリシャの数学者ヘロンとの関連性にも言及している（同上）。このように、あれやこれやと読者の想像力を刺激するのも、賢治世界の特徴の一つかもしれない。

6) 天沢退二郎「解説」、『新修宮沢賢治全集』第11巻、筑摩書房、1979年、331頁。

7) 続橋達雄『宮沢賢治・童話の軌跡』桜楓社、1978年、91頁。

8) 中野隆之『宮澤賢治童話作品論集』葦書房、1996年、311頁。

9) 「今日は、今日は」や「さよならね」といった執拗な挨拶、雨が降った時の「パッセン大街道」の状態への言及など、慣習的なものの繰り返しが、蛙たちのステレオタイプ化した生の内容を暗示している。愉快なのは、語り手みずから「蛙の挨拶の「さよならね」ももう鼻について厭きて参りました。もう少しです。我慢して下さい。ほんの

う少しですから」と、挨拶の執拗さに言及していることである。ちなみに、このような、聞き手（読者）に向かって「我慢して下さい」、「辛抱して聞いてください」などと懇願する語り手は、ゴーゴリと宇野に特有のとばけ顔の語り手である。

10) 日本における『外套』の初訳は明治42年（西本翠蔭訳『外套』）。賢治がこれを読んだかどうかはわからないが、『外套』を下敷きに書かれた芥川龍之介の「芋粥」（大正5年）や宇野浩二の「蔵の中」（大正8年）は読んでいたのではないか。芥川と宇野の作品だけでも、誇張をベースにして細部を巨大な寸法にまで引き伸ばす、ゴーゴリ風のシンボリズムは学べる（ゴーゴリの＜寸法変え＞の手法については、以下の拙稿を参照されたい。「ゴーゴリと日本文学」、原暉之、外川継雄編集『スラブと日本』弘文堂、1995年、214・235頁）。

11) アカーキイの外套の意味をめぐる詳細は、以下の拙稿を参照されたい。「作者と読者—ゴーゴリ『外套』再論」（海上保安大学校『研究報告』法文系62巻1号、2017年）。

12) 賢治は母木光宛の書簡の中で、母木の創作した童話の登場人物に触れ、こんなふう述べている。「リルラといふ名前がなめらかすぎて性の悪いこどもの性格容貌が出ない」と一応考へられます。どの字かをマ行、サ行、ハ行などの一音とかへてはいかゞでせうか」（昭和七年六月二十一日付、母木光宛書簡一『新校本宮澤賢治全集』第15巻、書簡・本文篇、筑摩書房、1995年、406頁）。賢治の音の響きへのこだわりが窺い知れる。おそらく、「ヘロン」「ペネタ」「ルラ」などの音の響きにも賢治なりのこだわりがあるのだろう。賢治がこだわっているのは音の響きだけではない。たとえば、後期形になって登場するリルラの父は片仮名ではなく、平仮名と漢字を組み合わせで「がん郎」と名づけられている。「がん郎」はその響きと表記の双方から、支配欲の強い頑固な旧世代をシンボライズする。

13) この手法については、拙稿「宮沢賢治と読者—童話「かしはばやしの夜」を読む」（『論攷宮沢賢治』19号、中四国宮沢賢治研究会、2023年）を参照されたい。

14) 詳細は拙稿「宮沢賢治と言葉—「注文の多い料理店」考」（海上保安大学校『研究報告』法文系62巻1号、2017年）を参照されたい。

15) たとえば、ベン蛙とブン蛙がいっしょにカン蛙のうちにやってくる場面では、約2ページにわたって会話だけが連ねられているが、結局のところ、ベン蛙とブン蛙のせりふは、どちらか特定できないようになっている。

16) カン蛙、ブン蛙、ベン蛙はカン蛙の家の前の「つめくさの広場」に座って、雲見をしている。おそらくこの「つめくさの広場」は彼らの共同の行為の場として意味がある。

17) 差異の問題に対する賢治の関心の深さは、たとえば、次のような平等と差異をめぐる人々の意識を取り上げた詩「火祭」を書いていることから察せられる。「(…)／くらしが少しぐらゐらくなるとか／そこらが少しぐらゐきれいになるとかよりは／いまのまんまで／誰ももう手が出ず／おれよりもきたなく／おれよりもくるしいのなら／そっちのほうがずっといいと／何べんそれをきいたらう／（みんながおなじにきたなくでない／みんながおなじにくるしくでない）／(…)／さうしてそれもほんたうだ／（ひば垣や風の暗黙のあひだ／主義とも云はず／たゞ行はれる巨きなもの）／(…)」。

18) 詳細は、前掲の拙稿「宮沢賢治と言葉—「注文の多い料理店」考」を参照されたい。

19) 前掲、続橋達雄『宮沢賢治・童話の軌跡』、91頁。

20) 吉田精一「解説」、『芥川龍之介全集』第1巻、筑摩書房、1971年、406頁。

21) ただ、『死せる魂』は例外である。読者を信じきれなくなったゴーゴリはここでは、

『鼻』や『外套』におけるように徹底的に笑いのめす一方で、時に抒情的に逸脱し、自身の素顔をさらけ出す。

22) 芥川は宇野浩二を評して次のように述べている。「浩二氏の作品には氏をして真正のヒューモリストたらしむべく余りに泣き笑ひの妙味がない。予は氏の前途の為に、氏の中にある戯奴の眼にも、一滴の涙の宿る日を切に期待したいと思ふ」（「大正八年度の文芸界」、『芥川龍之介全集』第5巻、筑摩書房、1971年、238頁）。

23) 前掲、中野隆之『宮澤賢治童話作品論集』、314-315頁を参照。

※賢治作品からの引用はすべて、筑摩書房版『新校本宮澤賢治全集』に拠る（ただし、ルビに関してはこの限りではない）。